

聖書：Ⅱサムエル1：1～27

説教題：サウルのために泣け

日時：2017年11月12日（夕拝）

今日からサムエル記第二に入ります。前回は述べましたように、サムエル記第一と第二は、もともと一つの書です。それがギリシャ語訳が作られた際に2巻に分けられました。ですからここから新しい書が始まるわけではありません。しかしここから新しい区分が始まるというのはその通りでしょう。このサムエル記は主にサムエルとサウルとダビデの3人の生涯に焦点が当てられています、すでに先の二人は舞台から去りました。特にこれまでダビデをしつこく追いかけて、命を狙ったサウルが、前回の章で壮絶な死を遂げました。とするなら、ダビデは苦境から解放されて、いよいよ王となる時が来たということになるのでしょうか。このサムエル記第二1章では、サウル之死をダビデがどのように受け留めたかが記されています。

まずダビデにこの一報を知らせたのは一人のアマレク人でした。彼は着物を裂き、頭に土をかぶって、ツィケラグにいたダビデのところへやって来て、「サウルも、その子ヨナタンも死にました」と告げます。私たちは彼の言葉を読む時、少々戸惑います。なぜなら彼が言っていることは、前の章に記されたことといくらか違うからです。前の章では、サウルが死んだのは自分から剣を取り、その上にうつ伏せに倒れたからだとして記されていましたが、今日の章でアマレク人は、自分がたまたまこの場所に居合わせて、サウルに「殺してくれ」と頼まれたので、そうしたと言っています。その他にも細かな点では食い違いがあるように思われるところがあります。果たしてこれはどのように考えたら良いのでしょうか。ある人は、この二つの記事は互いに補い合って考えるべきだと言います。すなわち前の章に記されたようにサウルは自害を試みたものの、実はずまく行かず、翌日まで生き延びてしまった。そしてペリシテ人たちがサウルのところへやって来る前にアマレク人が通りかかり、彼の助けを得て最終的に死んだのではないかと。しかしそうではないと思われます。先に触れたように、サムエル記第一と第二は一続きの書です。もしこれらが別々の時期に書かれたり、その著者が違っていたりするならば、サウル之死を別々の角度から書いたと解釈できないこともありません。しかしこれらは連続して書かれたものです。そして押さえるべきは、前の31章はこの書の著者による記述であり、いわば事実の記録であるのに対し、今日の章にあるのは一人のアマレク人の証言です。ですからこれは同じレベルの言葉ではありません。彼が偽りの証言をして

いる可能性もあります。むしろ前の章で事実を記録した著者は、それに照らして、今日の章のアマレク人の証言はおかしいと、読む者たちが気づくことを前提として、この章を書いていると考えられます。実際、このアマレク人の証言には不自然なところがあります。なぜ彼はダビデのところへこの知らせを持って来たのでしょうか。サウルの死を報告すべきはまずイスラエルの町々あるいはその長老たちに対してではないのでしょうか。ダビデはこの時、サウルから追われて、ペリシテ領内のツィケラグに亡命している状態です。そんな彼のところにわざわざこの知らせを持って来たこと自体、不自然です。また6節で彼は「私はたまたまギルボア山にいましたが」と言っていますが、激しい戦いが繰り広げられている戦地に旅行者のようにたまたま居合わせたという話も、ちょっと不思議です。多くの注解者たちが言っているのは、このアマレク人はダビデに取り入ろうとしていたのだらうということです。彼はたまたまここに居たのではなく、何か分捕り物を得ようとして陰に隠れていた。そしてサウル王の死を見届けた。そして翌日にペリシテ人たちがやって来る前にサウルから王冠と腕輪を外したのでしょう。さてこれからどうしたら良いか。これからはダビデの時代です。彼を中心にして世界が回って行くことが予想されます。そこで彼はいち早くダビデに取り入ろうとした。その際、ただ事実を報告するのではなく、自分の株をあげるような話をでっち上げた方が得策です。ダビデはサウルに命を狙われていましたから、そのサウルの命に最後のとどめを刺したのは自分だということにしておけば、ダビデの栄えある家臣としてももらえるかもしれない。もちろんあからさまにそんな態度を取るのははしたないので、いかにもサウルの死を悼んでいるかのようなジェスチャーをしましたが、心の中ではダビデに迎え入れられ、新しい時代の波にうまく乗っかって行くことを目論んでいた。在留異国人であった彼にとって、これは出世の大チャンスです。一発昇進を狙えるまたとない機会です。

しかし彼の予想は大きく外れます。11～12節にありますように、ダビデはこれを聞いて衣を引き裂いて悲しみます。家来たちと悼み悲しんで泣き、夕方まで断食しました。これはアマレク人ばかりでなく、これまでサウルからどんな仕打ちを受けてきたかを見て来た私たちにとっても驚くべき姿ではないのでしょうか。ダビデがヨナタンのために悲しんだと言うのなら分かります。しかし12節にまずサウルのため、そしてヨナタンのためにとあります。ダビデはサウルから命を狙われ、長くてつらい逃亡生活を強いられて来ました。そのサウルが死んだのですから、そのことで賛美し、喜びの祝宴を開いたとしてもおかしくない。しかしダビデはそういう人でなかったことがここに示されているのです。彼が心からこのことを悲しんだことが以下の2つの出来事に示されています。

その一つ目はアマレク人の処刑です。ダビデは 13 節で「おまえはどこの者か」と尋ね、「主に油注がれた方に、手を下して殺すのを恐れなかったとは、どうしたことか」と問い、彼を処刑します。もしダビデがサウルの死を喜んでいたら、それを知らせてくれたアマレク人をこのように扱うことはしなかったでしょう。このダビデの言葉は、これまで見て来た彼の言葉と一致します。彼はこれまでもサウルに手をかけ、その命を取るチャンスが繰り返しありましたが、そうしませんでした。部下たちが「今こそその時です！主がサウルをあなたの手に渡されたのです！」とせき立てた時も、ダビデは「どうして主に油注がれた方、私の主君に対して、そのようなことができようか」と言って、決してそのことをしませんでした。ダビデはさばきは主がなさることであって、自分のすべきことは主が立てられた人を敬い、従うことだとわきまえていました。もちろん上に立つ人が御言葉に反することを命じるなら、私たちは「人に従うより、神に従うべきです」と言って抵抗しなければなりません。しかしそうでないなら、立てられた人を敬い、従うのが神の御心です。その人に手をかけるのはもっての外であり、不遜な態度を取ることもいけないことです。ダビデはそのように生きて来ました。ところがこのアマレク人は、その恐れもなく、サウルを殺したと言い放ちます。その証言にダビデは心から憤ったのです。これは他人がやったことであって私には都合が良かったなど喜んではいません。

もう一つ、ダビデが心からサウルの死を悲しんだ証拠は 17 節以降の哀歌です。これはダビデの心情が吐露されている歌です。ダビデはこれをユダの子らに教えるようにと言って作りました。大まかに見ると内容は以下のようになっています。まず 19 節は嘆きです。サウルとヨナタンが殺されたことを悲しんでいます。20 節には、これをガテとアシュケロンに告げるなどあります。これらはどちらもペリシテ人の町であり、敵がこの知らせに勝ち誇ることはないように！ということでしょう。21 節ではサウルとヨナタンが戦死したギルボアの地には雨が降らないように、作物が実を实らせることがないようにと祈られています。続く 22～23 節は二人への賞賛の言葉です。ヨナタンの弓やサウルの剣はむなしく帰ったことがなかった。それは必ず敵を倒し、その肉を貫いた。そして 24 節では「サウルのために泣け」と言われています。この節後半の「サウルは紅の薄絹をおまえたちにまとわせ、云々」という部分は、サウルによって多くの祝福と繁栄がイスラエルにもたらされたということでしょう。そして 25 節の途中から 26 節にかけてはヨナタンのための嘆きです。ダビデとヨナタンの厚い友情はこれまで見て来た通

りです。そのヨナタンの愛、ヨナタンの真実は、女の愛にもまさると言われています。そして最後の 27 節も、彼らが倒れたことへの哀悼が歌われています。

さて以上のⅡサムエル記 1 章は、サムエル記の中でどういう意義を持っているのでしょうか。それは、ダビデはサウルの死とどのように関わり、また彼の死をどう受け止めたかを明らかにすることにおいて大きな役割を持っていると言えます。今後イスラエルの第二代の王となるダビデに関して、ともすると問われる問いは、ダビデはサウルの死に何らかの意味で関わったのかということでしょう。ひそかな仕方でサウルを害したのか。王座を自分のものとするために何か状況を操作するようなことをしたのか。一旦ダビデはペリシテ人の地へ出て行き、ペリシテ軍に混じる形となりましたが、彼はそうしてペリシテ人を利用してサウルを殺したのか。直接的にはそうしていなくても、間接的な仕方でサウル殺害に関与したのかということです。それに対して、それは全くない！ということ、その疑念を全く晴らす役割がこの章にはあると言えます。

この章に出て来たアマレク人は、サウルが死んだというニュースをダビデに届けば、自分は報いを受けられるものと期待しました。ダビデはサウルの死を喜ぶに違いない。イスラエル人の中にも、そう考える人たちがいたことでしょう。しかしダビデは全くそういう人でなかったことをアマレク人は驚きをもって知ることになりました。それはこの章を読む私たちも同じです。ダビデは自分がこれによって何を得られるかということよりも、主に油注がれた人への正しい敬意を持つことに、より大きな関心を向けていた人でした。この章後半の哀歌は、そのダビデの心情を表しているものです。これはダビデがサウルのクーデターを導いたのではないことをはっきり示しています。ここにある油注がれた人およびその王子に当たるヨナタンへの愛と敬意は、そのような考えを排除します。サウルのこの運命について、ダビデを責めることは全く不可能なのです。

私たちがここから学ぶことは何でしょうか。それは何と言ってもダビデの信仰姿勢ではないでしょうか。ダビデは主からイスラエルの次の王となるという約束を受けていましたが、自分の手でそれをもぎ取ろうとしませんでした。彼はサウル王とその一家に忠誠を尽くして歩みました。彼はサウルから多くのつらい経験を強いられたのに仕返しをしませんでした。それをしようと思えばできるチャンスが繰り返しあったのに、そうしませんでした。そして今、サウルの死の知らせを前にして、彼は喜んではおらず、むしろ悲しみに心が張り裂けそうになっている人として描かれています。彼は決して、権力

にどん欲な人として描かれていません。サウルとその息子ヨナタンに対するダビデの愛と敬いは、この哀歌に見られる通り、否定できません。彼はユダの全住民に、これを共有するように命じています。彼はこうして主が立てられた器を敬い続ける歩みを最後まで貫いたのです。

そして同時に私たちがここに見るのは、このようなダビデに対する主の真実なお導きではないでしょうか。主はダビデをサウルの手から救い出し、やがてサウルに代わる王とするという約束を与えていました。しかしその約束はIサムエル記を読む限り、なかなか成就しないように思われました。ダビデはサウルに追われる日が続き、ついにはペリシテの地に逃げて行くほどとなり、苦しい日々を送りました。主の約束は本当に実現するのか。それはいつ、どのようにしてなのか。その問いがずっとありました。しかし、ついにここで事が大きく動いたのです。主の定めに従って、立てられた王を敬い続けたダビデを、主はサウルの手から救い出されました。この期間を経て、ダビデは次の王になるにふさわしい者であることを自ら証明し、またそのように整えられたのです。神はサウルの頑なな歩みに対して正義をもって答えられたと同時に、ダビデを王とすべく、新しい始まりをここに与え始めてくださったのです。

私たちもここから、人間的な知恵や画策によって祝福をつかみ取ろうとしてはならないことを改めて教えられます。思う通りに行かないからと言って、主への信頼を投げやったり、勇み足を踏んだり、人間の力で手に入れようとするものがあってはならない。私たちが求めるべきは、主の御言葉に従い、主の時を待つことです。そのタイミングは遅いように思われるかもしれませんが、なかなか約束の時は来ないように思われるかもしれません。しかし主は必ずその時を来たらせてくださいます。その主の真実を仰いで、私たちは自分のなすべきことをなすことに専心没頭する者でありたいと思います。主に信頼して、主がお命じになっていることに従う歩みをささげ続けたいと思います。その者に主は奇しい方法で約束のことを導いてくださいます。その御手に信頼して、主がついに時満ちて開いてくださり、与えてくださる祝福の道にこそ歩んで行きたいと思いません。